

## 「薬子の変」

藤原薬子は、「藤原種継」（ふじわらのたねつぐ）の娘として「藤原式家」に生を受ける。

藤原式家とは、日本で最初の本格的な法制「大宝律令」立案や平城京遷都に尽力した「藤原不比等」（ふじわらのふひと）の三男「藤原宇合」（ふじわらのうまかい）を祖とする家系だ。藤原不比等の子4人が立てた家系は、南家、北家、式家、京家の4家に分かれた。

藤原薬子の父・藤原種継は、第50代天皇「桓武天皇」が平城京から長岡京に遷都した際、都造りに尽力した人物だったが、遷都反対派に暗殺される。藤原種継の死後、藤原薬子は同じ藤原式家の「藤原縄主」（ふじわらのただぬし）に嫁ぎ、三男二女をもうけた。

そして自身の長女が桓武天皇の皇太子「安殿親王」（あてのしんのう：のちの平城上皇）に輿入れすることとなり、娘の輿入れに伴い、付き添いとして宮仕えを始めた。娘の付き添いとして東宮（皇太子の住む宮殿）に入った藤原薬子だったが、なんと娘の夫である安殿親王と不倫関係となる。2人の関係は安殿親王の父・桓武天皇の怒りに触れ、藤原薬子は東宮を追われることとなった。

しかし、806年（大同元年）に安殿親王が平城天皇として即位すると、藤原薬子は再び後宮に戻る。典侍（ないしのすけ：宮中女官で2番目に高い位）、続いて尚侍（ないしのかみ：宮中女官の最高位）と、次々に高い役職が与えられ、平城天皇の寵愛を独占。藤原薬子の兄「藤原仲成」（ふじわらのなかなり）と共に権力を持つようになった。

806年（大同元年）に即位した平城天皇は、わずか3年で退位し、809年（大同4年）の4月「平城上皇」となる。続いて、平城上皇の弟「嵯峨天皇」が即位。嵯峨天皇は、自分の子ではなく、平城上皇の息子「高丘親王」（たかおかしんのう）を皇太子に据えたことから、嵯峨天皇が即位した当初、平城上皇と嵯峨天皇の関係は良好であったと考えられている。平城上皇がわずか3年で嵯峨天皇に譲位したのは、自身の健康上の理由があった。

ところが、譲位から半年後、809年（大同4年）の11月頃には、平城上皇の病状は回復。反対に、翌810年（弘仁元年）の1月頃から、今度は嵯峨天皇が病に伏すようになった。もともと譲位にも反対していた藤原薬子とその兄・藤原仲成は、平城上皇の重祚を画策。平城上皇側の影響力が強くなり始めたため、嵯峨天皇側が警戒するようになった。この頃から両者の関係は悪化し始めたとされる。

809年（大同4年）12月、平城上皇は旧都だった平城京へ移り住み、810年（大同5年）6月には、観察使（かんさつし：地方政治の状況を観察する役職）を廃止し、参議（さんぎ：朝廷組織の最高機関である太政官の官職のひとつ）を復活させた。平城上皇側が重要な改変を行うことができるのだと周囲に示し、上皇の権力をより強固にするための行動だったと考えられている。平城上皇の一連の行動に対して、嵯峨天皇は「蔵人所」（くろうどどころ）を設置。蔵人所とは、機密文書などを取り扱う役所で、平城上皇側に情報を漏らすまいとする意図があった。旧都の平城京を拠点とする平城上皇と、平安京を拠点とする嵯峨天皇は、事実上の二朝対立状態となった。

810年（弘仁元年）9月、藤原薬子にたき付けられた平城上皇は、遂に平城京への遷都

を宣言した。嵯峨天皇は、平城上皇の遷都を拒んで平城京を封鎖したため、平城上皇は拳兵。嵯峨天皇は、「坂上田村麻呂」（さかのうえのたむらまろ）を送り、事態の鎮圧を図った。平城上皇は藤原薬子と共に進軍するが、朝廷側の守備には敵わず、諦めて平城京へと帰京。嵯峨天皇の迅速な対応により、平城上皇が拳兵した薬子の変は、武力衝突に発展することなく、宮中の内紛として収束した。その後、薬子の変に加担したとして、藤原薬子や側近は官位剥奪や左遷などの処罰を受た。なかでも藤原仲成は処刑と言う重い罰が課され、藤原薬子は追放となる。平城上皇は剃髪し、余生を過ごしたが、藤原薬子は服毒による自殺を遂げている。

上皇はもともと非常に高い位であり、天皇とほぼ同等ともされていた。しかし薬子の変から教訓を得た嵯峨天皇は、自身の譲位の際に上皇と天皇は立場が違うことを明言し、以降、上皇の立場と影響力が以前よりも弱まったと言われている。同様に、藤原薬子が務めていた尚侍という宮中女官の権力も弱まり、代わって蔵人（くろうど：宮中の秘書にあたる役職）が活躍するようになった。

桓武天皇、平城天皇、嵯峨天皇の時代は、朝廷や天皇家が藤原家との権力争いに翻弄された時代でもあった。藤原式家は藤原薬子や藤原仲成と共に権勢を振るったが、薬子の変により没落。藤原不比等の次男「藤原房前」（ふじわらのふささき）を祖とする藤原北家は、薬子の変を乗り越え、「藤原冬嗣」（ふじわらのふゆつぐ）が嵯峨天皇の腹心となり繁栄していった。藤原北家はその後、政治に深くかかわるようになり、平安時代における藤原摂関政治への第一歩を築いたのだ。

長らく、平城上皇が嵯峨天皇と対立し、遂に遷都を宣言したのは、寵愛を受けていた藤原薬子とその兄である藤原仲成がそそのかしたためだとされてきた。そのため薬子の変と言う名が付けられたとも言われている。しかし、歴史研究が進むうちに、藤原薬子は「伝えられているほど悪女ではなかった」と言う説も有力視されるようになった。さらに、平城上皇は、側近に操られるような存在ではなく、平城上皇自体が復権を望み、主体的に動いていたとも考えられている。つまり、天皇を悪く言うことを避けるため、藤原薬子が必要以上に悪女に仕立て上げられた可能性もあるのだ。こういった説を背景に、現在薬子の変は、「平城太上天皇の変」とも呼ばれている。

『日本紀略』（にほんきりやく）は、平安時代に編纂された歴史書で、六国史の抜粋と、六国史以後後一条天皇までの歴史を記す。範囲は神代から長元9年（1036年）まで。編者不詳。漢文、編年体、全34巻。

六国史・・・《日本書紀》《続日本紀（しよくにほんぎ）》《日本後紀》  
《続日本後紀》《日本文徳天皇実録》《日本三代実録》

## 坂上田村麻呂

50代天皇「桓武天皇」（かんむてんのう）が行っていた事業のひとつである蝦夷（えみし／えぞ）討伐において、その優れた武勇を存分に発揮した。

797年（延暦16年）には、遂に征夷大將軍にまで上り詰め、801年（延暦20年）に3度目となる蝦夷討伐を実行。

「胆沢城」（いさわじょう：岩手県奥州市）を築き、当時の軍事機関であった「鎮守府」を同城に移した。

蝦夷の平定に大きく貢献した坂上田村麻呂は、810年（大同5年／弘仁元年）に起こった「薬子の変」（くすこのへん）の鎮圧でも武功を挙げ、「正三位・大納言」（しょうさんみ・だいなごん）に任ぜられた。



## 高岳親王（真如）

明治時代以前、真実の仏教を求めて天竺（てんじく／インド）へ向かおうとした人が3人知られている。栄西（ようさい）禪師、明恵（みょうえ）上人、そして真如親王だ。

父：平城天皇 第3皇子 799年生まれ <sup>アリフラノナリヒラ</sup>在原業平：平城天皇の第1皇子阿保親王の子  
嵯峨天皇時皇太子になるも薬子の變（810年）により、皇太子を廃絶 11歳  
その後、出家して「真如」となる。のちに835年（承和2）楊梅（やまもも）宮の跡地をたまわってそこに超昇寺が創建される。

やがて真如親王は東大寺に住み、道詮（どうせん）に師事して三論宗を学んだ。

さらに空海の弟子にもなった。

東大寺の大仏は鎌倉時代、江戸時代に再建されたが、実は855年にも頭が落ちた（自然に落ちた！？地震の影響！？）。

真如親王は「仏事を荘厳（しょうごん）し、旧物を修理するは、功德（くどく）を得る所、新造に勝（まさ）る」という考えのもと、官物（公費）ではなく、天下の人々に「一文の銭、一合の米」を論ぜず、無理なく協力できることをしてもらい、小さな力をたくさん集めて大仏を復興する方針を立てた。これは聖武天皇と同じ考え方で、重源上人や公慶上人にも受け継がれた。861年開眼供養が行われた。

開眼供養後、全国の山林、聖地をめぐりたいと朝廷に願い出る。出家して40余年にもなるのに一事も成し遂げていない、残り少ない人生をそんなふうにごろごごしたいというのが理由だった。そして唐へ向かって出発するのが念願だ。861年6月奈良の超昇寺を出て、唐へ旅立つ。奈良から南下した真如親王の一行は、巨勢寺（こせでら／現在の奈良県御所市）に入り、そこで20日を過ごした。同行した伊勢興房（おきふさ）の記録によれば、巨勢寺には南都の七大寺から別れを惜しんで多くの僧侶が集まり、巨勢寺から難波津へ向かった際も、数十人の僧侶がどこまでも付いてきたそうだ。

難波津から船で九州の大宰府に行き、唐の商船に乗せてもらうつもりが間に合わず、新たに船を建造します。そして9月3日、総勢60人で唐へ向った。この時、真如親王は64歳だった。航路は順調で、4日後の7日に明州（現在の寧波）に着いた。そのあと越州、杭州、揚州、泗州、洛陽などを経て長安に入ったが、真如親王は、唐には自分の師である道詮におよぶ人はいない、唐では仏教の疑義を解明できないという結論に達した。

そこで、天竺（インド）へ行く許可をもらい、日本から一緒に来た大半の人々を帰国させ、真如親王を含む4人で広州から天竺へ向かって船出しました。真如親王の消息はそこで途絶る。やがて、真如親王が羅越（らえつ）国で亡くなったという情報が伝えられた。羅越国とは、現在のシンガポールあたり。

## 超昇寺

奈良市にあった寺。超勝寺とも書く。

前期の超昇寺は佐紀神社亀畑の北側にあった。南都十五大寺の一つだったとのことで、立派なお寺だったのだろう。

後期の超昇寺は上記の佐紀神社の南側にあった。元奈良市立佐紀幼稚園のあたりだ。10世紀の末、興福寺の清海がこの寺に住み、7日間の大念仏（超昇寺大念仏）を始め、極楽浄土の曼荼羅をえがいた。これを〈清海曼荼羅〉といい、日本の浄土三曼荼羅の1つに数えられる。中世の戦乱により衰退し、江戸初期にはわずかに堂1宇を残すのみとなり、隆光が復興につとめたが、ついに廃絶した。

明治の廃仏毀釈により廃寺になった。

## 浄土三曼荼羅

阿弥陀如来のいる西方極樂浄土のありさまを表す。

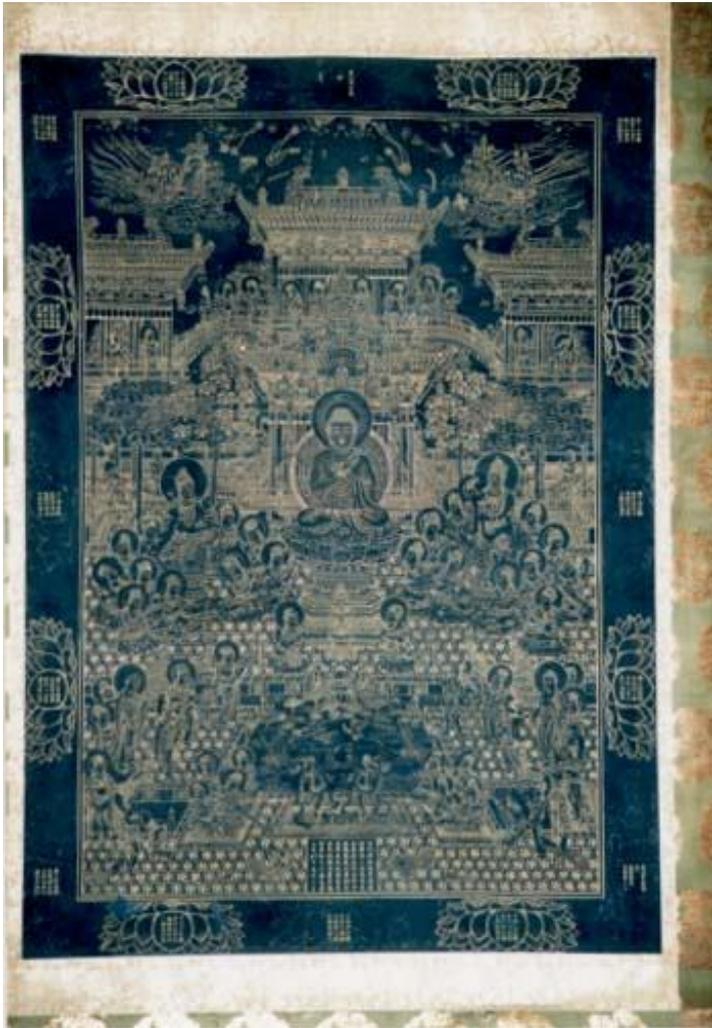
## 清海曼荼羅

興福寺で出家した常陸国の清海が著したと伝えられている。

智光曼荼羅・当麻曼荼羅(たいまんだら)とともに阿弥陀浄土を図示したもので楼閣・宝池とともに阿弥陀如来・諸菩薩を配し、外側に蓮華座をめぐらしているが、当麻曼荼羅よりは簡素な構図になっている。

清海は平安時代中期の僧で、常陸国に生まれ興福寺で出家し、超昇寺に移り阿弥陀仏を信仰して、清水寺観音から授けられたのが、この曼荼羅であるといわれている。

江戸時代に書写した紺地金泥画で、享保17年(1732)1月13日鎌倉光明寺第58世義誉観智上人が寄進されたもので、同上人は当寺第34世住職で享保11年(1726)3月鎌倉へ移られた。裏書きによれば、当寺には第24世白誉上人が法女の変相すなわち当麻曼荼羅を描かせたものだが、他の2つの曼荼羅がなかったので、これを奉納すると記されており、義誉上人が鎌倉へ移されてから、智光曼荼羅とともに寄進されたものだ。



県指定 有形文化財 絵画

## 綴織當麻曼荼羅

奈良・當麻寺の本尊である綴織當麻曼荼羅（国宝、當麻寺蔵）は、およそ1250年前に現れた奇跡の曼荼羅として尊ばれてきた。そして、極樂浄土の様子を表す曼荼羅の成立に、極樂往生を望んだ奈良時代の貴族の娘である中将姫が関わったという伝承は、鎌倉時代から現在にいたるまで、広く知られている。

當麻曼荼羅と中将姫への長い信仰の歴史のなかで、およそ4メートル四方の巨大な織物である綴織當麻曼荼羅の絵画による写しが多数描かれてきた。中世以降、縮小版が多数作られた一方、同じ大きさの写しも製作されている。そのような中で、最も詳細に綴織當麻曼荼羅の図様を伝え、鮮やかな色彩で描かれた名品が、江戸時代の延宝7年

（1679）に描かれ、貞享3年（1686）に靈元天皇の宸筆<sup>シンピツ</sup>を得て完成した、貞享本<sup>ジョウキョウホン</sup>當麻曼荼羅（重要文化財、當麻寺蔵）だ。



重要文化財 當麻曼荼羅（貞享本） （奈良・當麻寺）  
江戸時代・貞享3年（1686）

## 智光曼荼羅

『智光曼荼羅』とは、奈良市の元興寺に伝わる智光が感得したという曼荼羅の図像に基づいて作られた浄土曼荼羅の総称である。浄土三曼荼羅の一つ。『当麻曼荼羅』が『観無量寿経』に基づいて画面を4分割する複雑な画面構成をとるのに対して、『智光曼荼羅』は極めてシンプルな浄土図のみの図様をとっているのが特徴である。正本の智光曼荼羅は、宝徳3年(1451)の土一揆により禅定院で焼失した。興福寺大乘院門跡尋尊は2代目を興福寺絵所松南座の法橋清賢に制作を命じた。明応6年(1497)9月に清賢が描き始めた智光曼荼羅図は翌7年6月に完成して尋尊のもとに持参されたことが記され、その代価は5貫文であった。



厨子入 智光曼荼羅

重要文化財



板絵 智光曼荼羅

重要文化財